## 錦水流水引工芸

加茂さんが、

水引を始めた

川<sup>か</sup>加か 渕<sup>ぶ</sup>茂 も ゅ禮れ さ子こ

る加茂さんの実父は、

福住在住

http://members3.jcom.home.ne (8895) 3715

ちなみ錦水流水引という流派 を新たに興しました。 の工夫を重ね、伊達市錦町に ら水引の技術を受け継ぎまし 理人で松生流宗師の北野氏か 患者として来ていた元宮中料 た。さらに、教え広めるため で歯医者を営んでいました。

自然に覚え、忙しい父に代わ って教えたりもしていまし た」と当時のことを振り返り 加茂さんは「門前の小僧で

ために、作り方を図解したり ました。手本もなく、 娘の協力も得て、 さを知ってもらおうと思い、 そこで、多くの人に水引のよ まり知られていませんでした。 平成になるころに、 教材を作成したり、 ていましたが、水引工芸はあ 教室を開きました。「カルチャ れていたこともありましたが、 た。一時は、水引工芸から離 「真禮斎松玉園」を継ぎましその後、加茂さんが宗家 センターなどが盛んになっ 教室を開き 水引工芸 教える

加茂さん(右)と川渕さん(左)

子さんは、

水引工芸の錦水流二代目宗家子さんは、のし袋などを飾る

ことができ、奥が深いのが魅

何でも作る

力です」と笑顔で話す加茂禮

ています。 ました」と当時のことを話し いところから始めました。 北海道には材料もないの 取り寄せるのにも苦労し ま

「茅野」と呼ばれていた福住ススキが生い茂る様子から 開拓にちなんだ展示会を開催。 など、原風景の四季を表現し し、ススキなどの植物やキジ の開拓当時を水引細工で再現 拓の村」20周年のときには、 ども行っています。「北海道開 教室のほかにも、展示会な

くれました。

たいですね」

と目標を語って

てもらえるように広めていき

植物をモチーフにした工芸品 る水引から伝統的な鶴や亀や 三百点以上。二百色以上もあ 加茂さんが製作した作品は 作品は大きなものになる アクセサリーを創作しま



れています。 です。作品の一部は、 と完成まで一カ月かかるそう 水引のホームページで公開さ 錦水流

行っています。 さんは、平成九年から、宗家 理を楽しみながらの講習会も 行っており、 自宅アトリエでの水引指導を 川渕幸江(家元川渕禮光園)また、加茂さんの娘であっ どで、季節行事にちなんだ料 最近はホテルな

品の色使いが多様なので、と を基に作っても生徒さんの作 イメージが変わるので、手本 がら、さまざまなものを作り 結びや、季節や行事に合わせ ても新鮮です。自分の勉強に て、そのいわれなどを学びな 教室では、水引の基本の 色使いによって作品の

もらいたい。伝統行事などの くさんの人に水引工芸を見て 水引とともに生活に取り入れ いわれを子どもたちに伝えて 生になってもらい、もっとた 教室に来ている生徒さんに先 川渕さんは 「これからは、



水引

和紙をよって細いひも にしたもので、のし袋などを結ぶのに用いられます。もともとは宮中への 献上品を紅白の麻で結ぶ 慣例に由来しています。 慶事・弔事など、用途に 応じて色や結び方に決ま りがあります。



羽子板飾り



存在感のある華麗なキジ

渕さんは笑顔で

水引教室の楽し

いですよ」と川

さを話していま

もなって、

高さ170センチもある尾長鳥 と加茂さん

